

福祉施設

想像を絶する津波。
店が流され集まらない廃油。施設再開へ向けて

陸前高田市

中村 浩行 社会福祉法人大洋会 就労継続支援 B 型青松館 館長

取材日 2011.9.13

授産活動の1つとしてBDF精製に取り組んでいたが、協力業者の被災により事業を中断。その後、椿油を精製する新規事業を立ち上げた。東北で唯一椿油の搾油を担っていた陸前高田の製油所が被災し廃業、伝統の特産品・椿油が途絶えかけた。青松館では製油所関係者の協力を得て、地域復興のシンボルとなることを目指して椿油製造に取り組む。

3月11日 14時46分

震災があった3月11日当日は、勤務中だった。動ける方は駐車場に避難し、身体が不自由で動けない方は、テーブルの下に隠れてもらった。長く大きな地震だったので、津波がくると率直に感じた。実際に大津波警報が発令され、この時すでに「これは大変な事になる」と実感があった。

ただ、職場は高台にあり避難所に指定されているため、自分達が逃げなければならないとは思わなかった。まず思ったのは、津波がおさまった時に利用者の方々をどうして自宅に帰せばいいのか、利用者の家族で海岸線に住んでいる方々の安否確認、避難所である青松館に逃げてきた方々をどのようにしてケアすればいいのかということだ。

建物の中にいるのは危険だったので、利用者をまず外に避難させた。当日は寒い日だったため、外に止めてあったマイクロバスや自家用車のエンジンをかけ、利用者や避難者を乗せて待機してもらうことにした。また、隣にあるシルバー人材センターは倒壊の恐れがあったため、外に椅子を並べて利用者座ってもらった。自身は状況確認のために、青松館よりさらに高台にある陸前高田市内を一望できる場所へと移動した。地震から10分～15分後、その場所には多くの人達がすでに避難していた。

前々日にも大きな地震があり、津波警報が発令されて30-50cmの津波を観測したので、最初は2-3m程の津波を予想した。実際に、放送でも津波予測はその程度だった。高台に避難した人々と一緒に津波が到達するのを眺めていた。その時は、誰もが大きな津波になるとは思いもしなかった。

想像を絶する津波

高田松原の堤防は4-5mはあったと思う。堤防の外には7万本の松の木が植えられている。堤防で砂浜の状況を見ることはできなかったが、松の木が波に押され、堤防から水が流れ落ちたのが見えた。



その後は一気に津波が平野に押し寄せた。5分も経たないうちに水かさが増し、「バリッ」「バリッ」と音をたてて住宅が流され始めた。「まずい」。直感的に思い、車に乗せていた利用者を降ろし、付近の1m程小高くなっているところに全員を避難させた。その直後に、青松館の施設内にも1mほどの津波が押し寄せた。利用者を流されないように、ひと固まりにした。

駐車場に止めていた車は全部がぶかぶか浮かんで、入口の鉄門も浮かび、マイクロバスとぶつかりあった。「これ以上きたらどうしようもない」と思っていた時、水はひいていった。おかげで何とか助かった。

津波が平野を走り始めてから利用者を高台へ逃がし、津波がくるまでの時間は全く記憶にないほどあっという間のことに感じた。とにかく「凄かった」という思いだけが残る。

今まで経験した事のない出来事だったので、スタッフ共々無我夢中で行動したが、結果的に利用者全員が無事だったことが一番嬉しいことだった。

津波がひき、高台に二次避難した時、身体が不自由なお年寄り100人以上を抱えたり、おんぶしたりで自分の身体もかなりの疲労が重なっていた。休憩しながらたき火で暖をとっていた時、200mぐらい先に人が倒れているのが見えた。若い男性だった。

声をかけると、左腕が挙がった。水を飲んで溺れ、意識がない状態だった。下半身が水につかる状況の中、職員を含め6人で男性を担ぎながら高台に戻った。その後、男性は水を吐いて意識を取り戻し、消防団の方へ引き継いだ。

津波がおさまった後

津波がおさまった後、松原苑という老人保健施設へと避難した。駐車場には1,000人近くの人々が避難していた。

しかし、建物が倒壊の恐れがあり、施設の中に入ることはできなかった。外は寒く、凍死する人が出るかもしれない状況だったので、施設内のカーテンをはずし、シーツを出した。多くの避難者に行き渡るほどの量はなく、クリーニング事業も行っている青松館に戻り、中にあったシーツをかき集めてなんとか避難者全員に配布することができた。

その後、3km程離れた場所にある「ひかみの園」という入所型の施設の体育館に、青松館の利用者をマイクロバスでピストン移送し避難させた。そこで初めておにぎり1個と飲み物を口にした。

とにかく情報が欲しかった。午前0時を過ぎた頃、対策本部はどこに設置されたのか、車を借りて陸前高田市内を捜し回った。瓦礫で通れない道が多く、山手の道を走りながら対策本部が学校給食センターに設置されているのを確認した。とにかくライフラインの状況、他に避難している人はどこにいるのかを知りたかった。しかし、対策本部は全くといっていい程、機能していなかった。対策本部でも被害状況を把握していない。結局、欲しい情報を得る事はできなかった。

青松館の分場「せせらぎ」が5kmほど山手にあった。安否確認をしたかったので車で向かったが、瓦礫で道を阻まれて行くことができなかった。ところがその夜、施設の職員が懐中電灯1つで歩いて山を越えて、施設利用者や職員の無事を知らせに来てくれた。職員と再会を喜んだ。不安な一夜を過ごし、勤務先の本部がある大船渡は被害が少なかったため、3月12日に利用者と共に移ることになった。

大船渡の本部は電気、水道は不通だったが、非常用の電源があった。避難した施設にも300人ほどの利用者がいたので、備蓄していた食料を少しずつ皆で分け合いながら、困難な状況を乗り切る事ができた。

青松館再開へ向けて

震災翌日から2週間くらいは利用者の家族の安否確認を行った。家族の自宅が津波で流された方々

もいたので、今どこにいるのか確認するのにとても時間がかかった。施設職員も自宅を流され、家族も行方不明になっている職員がいたので交替で休ませた。家族や家が無事な職員は自宅に戻らないで、利用者と共に避難生活をした。

3月20日頃からは、施設の泥かき、片づけをはじめた。水は出ない、電気もないので、多くの人手と時間を費やした。施設の備品等を外へ運び、分場「せせらぎ」近くの井戸水をくみ、タンクに2t程の水を積んでトラックで運び、泥を洗い流した。

施設で行っている授産作業は、取引先を含めて全般的に大きな被害を受けた。特にBDF精製事業は、大変厳しい状況にある。廃油を集めていたコンビニや弁当店などがすべて津波により流されてしまったからだ。大量に供給してくれた鶏肉工場は被害が甚大で工場が廃業。しかし、現在は商店が徐々に営業を開始し、廃油は集まりつつあるが、それでも最盛期の10%に落ち込んでいる。まとめて作る程に廃油が集まっていないのが現状だ。当面、精製したBDF燃料は自家消費を考えている。施設で所有しているトラックで使用していく予定だ。

電気は4月下旬、水は5月中旬に復旧し、幾多の困難を乗り越え5月16日に青松館を再開することができた。

施設では、障害をもった方々の収入を確保することを目的に多くの作業を行っているが、震災後に通常の30%まで落ち込んだ事業の生産性が、現在は90%を超える程回復した。



震災時に撮った写真を手に当時を振り返る。